



「春の光」 絵/文 白澤 恵舟

山も里も一面の雪。なにもかも凍てついている中で、木々は春の芽吹き準備を怠らない。小さな取るに足らないような芽をみると、暖かい春への希望でそっと包んでやりたい。

コンクリートから人へ

会長 菅原 三朗

公共事業を取り巻く環境は、前政権当時より、竹中構造改革の歳出削減の目玉として、大巾削減が続いてきたが、昨年の政権交代により、新政権のキャッチフレーズである「コンクリートから人へ」「公共事業から福祉へ」の方針のもと、公共事業は更に大巾削減が断行された。

只違いは前政権当時は高度成長時代からの延長線上で、永年に亘る様々なシガラミの中で50年たっても完成しない八ッ場ダムに象徴されるように、不要不急の巨大プロジェクトをすべて温存しながら、地方の小規模事業まで一律に削減されつづけ、これにより遅れている地方と先進地域との一層の格差拡大の要因にもなってきたのではないと思われる。

新政権では全国143すべてのダムの見直しをはじめ、高速道路の新規事業の原則停止・全国6路線の高速道路4車線化の全面凍結・東京外環状道路の着工凍結など、不要不急の巨大プロジェクトから先に大巾削減をされるということは、公共事業に対する取り組み方に大きな変化が感じられるところである。

10年度予算案の公共事業関係費は09年度当初予算比で18.3%減の5兆7,731億で、6兆円割れは1978年度以来32年ぶりの水準である。減少の額と率はともに構造改革路線に転じた小泉政権下の02年予算を上廻り過去最大となっている。

政府はこのような中でも国から地方への予算を手厚く配分するため、国交省・農水省の両省は既存の補助金や交付金を統合した新たな交付金を創設、又直轄事業負担金のうち維持管理費分を原則廃止するとした。しかしながら民主党が重点要望で半減を求めた農業農村整備費は63.1%減の2,129億円に激減しており、本県でも計画的に推進している圃場整備事業費への重大な影響が懸念される場所である。

「コンクリートから人へ」「公共事業から福祉へ」と言うのであれば、福祉充実に一丁目一番地は遅れている地方の基礎的な生活基盤整備の促進と、安心安全のための防災対策の推進が、すべてに優先実施されなければならない、不可欠な前提条件である。公共事業を今後どこまで削減をつづけていくのかわからないが、これまで整備を続けてきた既存の社会資本の膨大なストックの維持更新需要は年々増大するのである。

リバーフロント整備センター理事長の竹村公太郎さんの言葉を借りれば、文明を支える要素は安全・食糧・エネルギー・交流であり、これらを支える下部構造がインフラストラクチャー(社会資本)である。特に安全については大雨で水があふれる洪水氾濫区域に人口の50%が集中し、また資産の75%が集中している我が国の現状や、近年の異常気象による洪水災害などが全国で発生している。国土を守るには安全に対して手を抜いてはいけぬ。着実な整備が必要である。人間は足腰が弱くなったら車イスに頼れるが、文明は下部構造が衰えれば同時に滅びるのである。

県建設交通部と建築関係企業が 意見を交わす



県協会は11月25日、秋田ビューホテルを会場に秋田県建設交通部と建築関係企業との意見交換会を開催し、企業43社が参加した。

同意見交換会は、県協会建築委員会(伊藤久一委員長)が平成21年度活動計画に掲げていたもので、建築企業が一堂に会するような事業は前例のない初の試み。

当日、県建設交通部からは、菊地建設管理課長、谷藤技術管理室長、湯沢建築住宅課長、小松宮繕課長、武田建設管理課政策監、塚田建設業班主幹(兼)班長の6名が

参加し、企業参加者と意見を交わした。

始めに、湯沢建築住宅課長、小松宮繕課長から、「建築業を取り巻く最近の話題」として市街地再開発事業や、低入札受注に対するペナルティ、解体における技術者の配置など情報の提供があり、続いて意見交換に移った。

参加企業からは、▽新卒高校生の採用による優先的発注▽格付けの技術者要件の緩和▽四者協議の充実などについて意見要望を訴え、有意義な意見交換会となった。

全国建設青年会議

魅力ある建設産業に向けて 第14回全国大会

全国建設青年会議は平成21年12月1日、東京都の経団連会館にて第14回全国大会を開催。全国から建設企業の若手経営者が集った。

今回の大会は東北ブロック(東北建設業青年会・富田名重会長)が幹事を務め、「魅力ある建設産業に向けて」をテーマに政治家、学識経験者を迎え、2部構成によるパネルディスカッションを行った。

大会の冒頭、登壇した富田会長は「今年度初めは明るい兆しが見えたものの、激動の夏を過ぎて真冬の時代が来た」と述べ、また、本来この挨拶をする人間は別にいた、と打ち明けた上で「周りの仲間・友人が倒産・廃業に

より消えた。しかし我々は生き残っている。残っている限りは声を出し続けなければならない」として、建設産業が地域の雇用、安心・安全を守るためにどれほど必要な役割を持っているかを発信していきたいと挨拶した。

大会では始め、高橋定雄ダム水源地環境整備センター参加が「社会資本整備の意義と重要性を考える」と題し講演。続いて行われたパネルディスカッションの第一部では、コーディネーターに竹村公太郎氏(首都大学東京客員教授)、パネリストに脇雅史参議院議員、佐藤勇氏(宮城県栗原市長)、見城美枝子氏(青森大学教授)を迎え、「将来のインフラ整備に向けて」と題し、建設業に対する



負のイメージや実態、社会貢献などについてそれぞれの立場からの見解を述べ、意見を交わした。

第二部では「これからの建設業のあり方」と題し、竹村氏を引き続きコーディネーターを務め、パネリストには同じく脇参議院議員、杉山文康中部ブロック会長、桑原克幸九州ブロック会長、富田名重東北ブロック会長が参加し、総合評価方式や賃金の問題、優良業者の生き残りについて議論した。

建退共・共済団

制度説明会・個別相談 県内8支部にて実施

建退共秋田県支部(事務局:(社)秋田県建設業協会)と(財)建設業福祉共済団は昨年10月から11月にかけて、建設業退職金共済制度、建設共済制度(法定外労災制度)についての説明会を県内8支部にて開催し、各地域の建設企業から延べ146名が参加した。

説明会では始め、建退共制度について基本的な契約・申込みの内容から、これまでに寄せられた実際の問い合わせや具体的な事例に基づいて制度の取り扱い等を解説。続いて行われた建設共済制度の説明においては、平成20年4月に改正となった共済金の支払区分などにつ

いて事例を織り交ぜて解説した。また、育英奨学金事業を紹介し、制度の積極的活用を勧奨した。

また、説明終了後は質疑応答のほか個別相談を実施。制度担当者が希望者と面談し、本説明会参加申込みと併せて事前に寄せられた内容について相談に応じた。



各種制度の相談・質問はこちらまで

◎建退共秋田県支部

018-823-5495

◎財団法人 建設業福祉共済団

03-3591-8451

秋田水風景

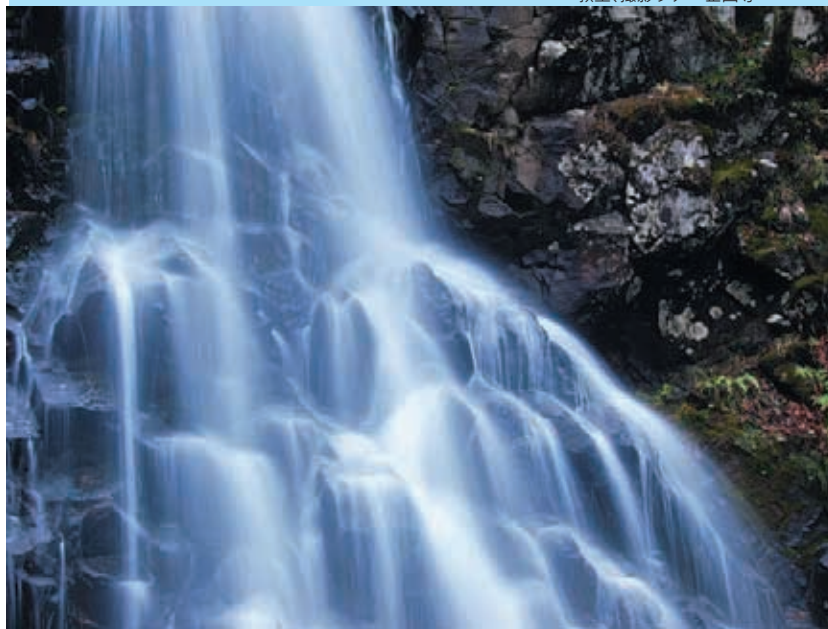
文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol. 9

四十八滝

【よんじゅうはちたき】
北秋田市桂瀬



病膏旨^{びやうこうじゆ}という言葉がある。辞書によれば、「救うことのできない状態にまで深入りすること」とある。

人は誰でも、尋常ではないほどに何かに夢中になってしまふことがある。たとえば「滝」がそうだ。趣味で写真を撮った人が、一度滝の撮影にハマってしまうと、取り憑かれたように各地の滝の撮影に奔走する。

昨秋の紅葉シーズンに私が森吉山麓の「安の滝」を訪れたときは、滝入口の駐車場には県外ナンバーのクルマが何台も止まり、そこから渓流伝いに小一時間も遡上しなければならぬ滝の前には、すでに大変なカメラマンの数。ベストポジションで撮影したいと思うと、先客が十分に撮影に満足して撤収するまでしばらく待たなければならぬほどだった。駐車場までの未舗装の林道の道のりだって相当の距離なのに、滝に取り憑かれたカメラマンたちには、

そんなものはちっとも苦にならないようだ。

ここに載せたのは、北秋田市桂瀬の「四十八滝」。ダイナミックな滝ではないが、美しい姿態が好ましい。位置的には、秋田内陸線の阿仁前田駅と桂瀬駅のほぼ中間の線路近く。国道から少し横道にそれるだけで、クルマを停めてから歩く距離もさほどなく、ドライブがてら気軽に立寄れる点も気に入っている。

先日、冬の四十八滝はどんなものかと、近くまで行つたついでに立寄つてみた。しかし、車道の終点から滝までのあいだの雪がとて深く、そこまでの装備はしてこなかったため探訪は諦めた。

あと数十メートルの距離まで来ていただけに、なんだかとても悔しい。「こういうときのためにカンジキでも買っておいたほうがいいかな」と、思ったりする。どうやら私も「病膏旨」の部類のようだ。

建災防秋田県支部 秋田分会より

「職長・安全衛生責任者教育」講習会を開催

ーリスクアセスメントの実践ノウハウを学ぶー

建設業労働災害防止協会(建災防)秋田県支部 秋田分会は、去る1月13日(水)~15日(金)の3日間にわたり、労働安全衛生法第60条に基づく「職長・安全衛生責任者教育」講習会を開催しました。

当日は、秋田上空を寒冷前線が横たわる真冬日で、受講申込者12名中修了者が10名と昨年より4名ほど少くはありましたが、受講者の皆さんは、「建設現場の労働者を直接指導又は監督する者」として熱心に講師の説明に耳を傾けていました。特に心強かったのが受講者の中に管理監督者を目指す女性の方もいたことです。送り出してくれた社長さんは、きっと建設現場の将来に明るい光と快適な職場環境の改善には女性としての暖かさと明るさを求めて、さらなる労働災害の潜在的な危険・有害性の除去・低減を担ってもらうと期待していると思います。これからもこうした女性の方々の受講者が増えてくれることを願っています。

講習会は、開講挨拶のあと、RSTトレーナー鈴木栄悦氏、同東海林宏氏並びにCFT講師の貝田勲氏等による「職長・安全衛生責任者の職務と役割」をはじめ、座学、グループ討議、事例研究の発表等の多彩な教育科目を受講者は和気藹々に聴講していました。

特に建設現場の安全衛生管理の役割を明確にし、建設事業の「計画(Plan)ー実施(Do)ー評価(Check)ー改善(Action)」サイクルの重要性が叫ばれることから、その実践のノウハウを学び、「ムリ、ムラ、ムダ」を無くし、建設事業の「品質向上」と「利益の追求」を目指し、さらなる企業の発展を願う講習会といたく、来年は受講者が増えることを期待しています。(講師 談)

情報コラム Vol.31

ワンストップ サービスセンター 事業を拡充

成長分野展開に関する相談4回まで無料

平成21年12月21日以降、「緊急雇用対策」(平成21年10月23日緊急雇用対策本部決定)及び「緊急経済対策」(平成21年12月8日閣議決定)により、**成長分野展開に関する相談については、従来2回から4回まで無料で利用**できるよう、ワンストップサービスセンター制度の拡充が図られました。

また、建設業総合相談受付窓口においては、経営相談として、以下のような情報提供・相談にも対応いたします。

- ・成長分野展開に活用可能な他省庁所管の支援制度
- ・雇用維持・能力開発に資する雇用調整助成金、建設教育訓練助成金等の各種支援制度
- ・地域建設業経営強化融資制度、下請資金繰り支援事業、緊急保証制度、セーフティネット貸付制度等の資金繰り支援制度

秋田県内では(社)秋田県建設業協会が窓口となっておりますので、ご活用下さいませようご案内申し上げます。

(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

「坂の上の雲」雑感

酢屋 潔

「坂の上の雲」がNHKで放映されたので、改めて昔読んで本を読みかえしてみた。この本の発行日は昭和四十五年だから四十年近くの歳月が経っている。

今でも鮮明に記憶に残っているものは一つしかない。それは秋山好古がコサック騎兵と遭遇した時である。

コサック騎兵は当時ミシチェンコ少将に率いられていて馬も人も大きく集団で陣地を突破するのを得意として世界最強をうたわれていた。この兵団と好古はまともに遭遇した。このコサック隊は騎砲を持っていた。更に秋山隊の苦戦の原因は丘陵地帯の隘路で戦闘しているため大きな兵力を展開することが出来なかった。日本騎兵は馬をすてて散兵線をつくり射撃していたが小銃弾がなくなった。そのうち敵をくい止めていた三台の機関銃の弾がなくなった。退却しかない、と諸隊長も思ったし誰しもが思った。しかし、好古は退却する意志は少しもなかった。戦術的には退却が妥当であることはよくわかっていて。退却して後方の隘路までひき下がり、そこで防禦陣地をつくって敵をささえればよい。しかし、好古の考えは違っていた。「これは日露戦争の第一戦なのだ。つねに最初の戦いが大事であり、ここで負ければ日本騎兵の士気に影響し、わるくゆけば負け癖がついてしまうかもしれない。ここで退却すればロシア騎兵に自信をつけさせ、今後の戦闘で彼等はいよいよ強くなるだろう」と思っていた。

ついに最前線の隊長のひとりがたまりかねて馬をとばして駆けてきて退却をすすめた。

「今、わずかながら我が方が勢いを盛りかえしております。この機会に後方にさがってはいかがでしょう」

好古はこれに対しうむと声を出したきり返事をせず、ブランデーを飲み乍らそばの支那の土塀の上に横になり隊長に背を向けた。寝ているしか、仕方がない。それが好古の心境だろう。

旅団長閣下が、最前線の機関銃陣地で不貞寝をしている、ということがこの戦況のなかで兵隊達の間でささやきかわされた。

いまさら、どうなるものでもない、と好古は思っていた。こんな状況では戦術もなにもあったものではない。(もう戦闘は一時間半もつづいている。敵はやがてくたびれるはずだ)ときめこんでいる。

敵はくたびれてくる、と好古がたかをくくりつづけたように、敵は次第に北方に退却しはじめた。

敵の指揮官は好古のように鈍感でなかった。この激戦に神経が耐えられなくなって適当な理由をつけて退却

しはじめた。

いずれにせよ、この戦闘は両軍の指揮官の神経のたたかいだった。ロシアの指揮官は好古の太さに負けた。

好古の故郷、伊予松山というところは領内の地味が肥え、物実りがよく、気候が温暖で、しかも郊外には道後の温泉があり、すべてが駑蕩としているから、自然、ひとに戦闘心が薄い、と司馬遼太郎も書いている。気持が大らかなのである。

つまり戦闘心はあるが、それを大らかさでつつんでいるのである。

秋山好古もそういうタイプの豪傑だったように思う。

ところで、司馬遼太郎はどのような思いでこの小説を書いたものだろうか。

この作品の執筆時間が四年と三ヶ月かかった。そして執筆期間以前の準備時間が五カ年ほどあった。

書き終えた時、夜中の数時間ぼうぜんとしてしまった。頭の中の夜の闇が深く遠くその中を蒸気機関車が黒い無数の貨車の列をひきずりつつ轟々と通りすぎて行ったような感じだった。この十年間はなるべく人に会わない生活をした。明治三十年代のロシアのことや日本陸海軍のことを調べる作業に前半は苦しかったが後半何事かが見えてきて、作業が少し楽になった。

取材にあたっては熱心のあまり大分人に迷惑をかけたことを悔いている。日露戦争の取材には参謀本部編纂の「明治廿七八年日露戦史」全十巻を参考にしようと思ったが全然使用にたえなかったという。時間的経過と算術的数量だけが書かれているだけだった。なぜこのような本が書かれたかと言えば論功行賞のためだった、という。戦後の高級軍人に待っているものは爵位を受けたり昇進したり勲章をもらうことであつた。

海軍の取材にあつては大分苦労があつたらしい。海軍も軍令部編纂で官修戦史を出しているが陸軍のそれよりも資料価値は高かったという。只困ったことに彼は海軍の事については全然わからず特にネーヴィの気分というものがわからなかった。そこで父上が海軍士官として日露戦争に従軍し、御当人も海軍軍人で海軍大学校を出たという人を探してその教示を受けた、ほどの熱の入れようだった。

司馬遼太郎は先にも書いたように陸軍に籍をおいたので軍の教条主義、形式主義、精神主義であることを身を以て感じていた。又太平洋戦争が何うしてはじまったか、に対しても総帥権問題を通じて批判を強めている。陸軍がこの統帥権を振りかざして太平洋戦争に突っ走ったかは、日露戦争の統帥権を論ずる中で言外に論じている。

ともあれ、私達は司馬遼太郎のお陰で忘れ去られている日露戦争というものを体感出来るのである。不朽の名作と云うべきだろう。